

## 【教育振興支援助成報告】

**未来の保育者としての総合的人間力を高める表現教育の開発****平成 29 (2017) ～令和元 (2019) 年度和洋女子大学教育振興支援助成報告**

大神優子、駒久美子、伊瀬玲奈、甲斐万里子、上村 明、島田由紀子、中村光絵

**Development of education in expression to enhance comprehensive human skills as future caregivers**OHGAMI Yuko, KOMA Kumiko, ISE Reina, KAI Mariko, KAMIMURA Akari,  
SHIMADA Yukiko, NAKAMURA Mitsue**要旨**

本稿では、本学こども発達学科（学類）で、平成29（2017）～令和元（2019）年度に和洋女子大学教育振興支援助成を受けて実施した取組課題「未来の保育者としての総合的人間力を高める表現教育の開発」について報告した。3年間で「自分を表現する」「他者の表現に応答する」「協同を通じた創造的表現力を育成する」というテーマを設定し、外部講師を招いたワークショップを中心に実践的な表現教育を行った。学生自らが表現することだけでなく、表現教育に関する知識・技術を構造化したり、自律性を高めたりすることを目指した。

**キーワード：**表現教育（education in expression）、総合的人間力（comprehensive human skills）、即興（improvisation）、創造性（creativity）

**1. はじめに**

平成27年7月、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（中間まとめ）において、教員としての使命感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力など従来必要とされてきた不易の能力に加え、「キャリアステージに応じた資質能力を高める自律性」「情報を収集・選択・活用する能力や深く知識を構造化する力」「学校を取り巻く新たな教育課題に対応できる力量」などが求められている。

本取組では、こうした資質能力を備えた教員養成を目指し、実践的指導力の基礎を強化するとともに、学生自身の創造的な学びの機会を提供することを目的とする。

幼児は、遊びのなかで主体的に対象に関わり、自己を表出することによって、知的好奇心や探究心が芽生え、表現することを楽しむようになる。そうした幼児の表現を受け止め、支えることができる保育者の資質のひとつとして、保育者自身の柔軟な創造的表現力をあげることができる。自分の表現に対して無自覚な学生が多い昨今、己の表現と向き合い、自覚的に捉えることによって、幼児の表現の意図に気付き、それを見守ったり、支えたりすることができるようになると考えられる。

本取組では、3年間に渡って、通常の授業だけでは網羅することができない実践的な表現教育に焦点をあて、様々な角度から「表現」を見つめ、「表現」に触れ、「表現」することによって、学生自らが表現することだけでなく、表現教育に関する知識・技術を構造化したり、自律性を高めたりすることを目指した。

## 2. 3年間の取組概要及び各年度の主な内容

表1に、3年間の取組の概要及び主なワークショップを示した。年度ごとに、素材や対象を拡大させつつ様々な取り組みを行ってきた。

表1 3年間の取組の概要

実施年度	テーマ	主なワークショップ (WS) ※本文中の写真No	1年生	2年生	3年生	4年生
2017	自分を表現する	入門編 WS (東京おもちゃ美術館)	○			
		音楽表現 WS (春畑セロリ)		○		
		造形遊び WS (斎藤清美)		○		
		人形劇 WS (デフパペットシアターひとみ)			○	
		身体表現 WS (新井英夫・板坂記代子) ※ 1,2				○
		遊び作家公演+ WS (小沢かづと) ※ 3	○	○	○	○
2018	他者の表現に 応答する	入門編 WS (東京おもちゃ美術館)	○			
		演劇 WS (花家彩子)		○		
		カプラブロック® WS (富安智子) ※ 4,5			○	○
		スマホでできる造形あそび WS (住吉浩史・尾花藍子) ※ 6-8				○
2019	協同を通じた 創造的表現力を 育成する	入門編 WS (東京おもちゃ美術館)	○			
		積み木 WS (童具館) ※ 13,14			○	
		映像を用いた表現活動 WS (間野健介) ※ 11,12				○
		パネルシアター公演+ WS (荒木文子)	○	○	○	○

以下、主な内容を報告する。

### 2-1. 2017年度「自分を表現する」

1年次から4年次まで、それぞれ現時点で身に付いている表現力は異なるものの、まずは内なる自分を見つめることから始め、自分の表現に対して自覚的になることを目指して、主に自分自身を表現することの基礎となるワークショップを実施した(写真1、2)。それぞれの学年で、即興することそのものが自分自身を表現することにつながり、表現するために創造的に思考することを学び、身体を通じた非言語による対話を即興で行うことの難しさ・楽しさを学ぶことができた。



写真1



写真2

学年ごとの取組の他、全学年を対象とした遊びをつくるワークショップも実施した（写真3）。また、今後の創作の前段階として、既存の紙芝居、パネルシアター等の体験を複数回に分けて実施した。



写真3

## 2-2. 2018年度 「他者の表現に応答する」

一年目の「即興」を通じた自分の表現をふまえ、二年目は「他者の表現に応答する」ことを目指して、演劇ワークショップや、カプラブロック®やスマートフォンといった「モノ」を用いて応答し合うワークショップを展開した（写真4～8）。



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8

また、一部上級生では学内ワークショップでの経験を保育所での表現活動に応用した。学生自身が気付いた即興的に表現することの楽しさを、幼児も味わうことができるためにはどのように活動を展開したら良いかを考える契機となり、こうした経験が表現教育に関する知識・技術を構造化したり、自律性を高めたりする効果につながった（写真9、10）。



写真9



写真10

### 2-3. 2019年度「協働を通じた創造的表現力を育成する」

最終年度である三年目は、総合的な表現者としての資質向上を目指して、様々なモノ（例：映像・積み木）を介した表現に関するワークショップを実施し（写真11～14）、さらに他者との協働を学内外・異学年に拡大することによって、創造的表現力の育成を目指した。



写真11



写真12



写真13



写真14

特に、本取組に1年次からかかわっている3年生は、保育現場での実習を経て、これらの経験を下級学年に伝える役割を担った（写真15、16）。



写真15



写真16

### 3. 取組成果

外部講師による複数のワークショップによって、学内教員のみでは難しい、幅広い表現を学生に体得させることができた。年度ごとに、報告書及び学生が原稿を担当した表現集冊子を作成した（写真17、18）。表現集冊子は当該学年のみならず下級生にも配付し、さらに、一部は保育現場で働く卒業生にも母校訪問等の機会を通して配付した。本取組以外の学科の教育課程でも授業間で連携して活用し、保育現場における実習を通じて活用されている。学術情報センター（旧メディアセンター）・こども造形実習室にも蔵書として備え、過去の分も活用しやすくしている。



写真17

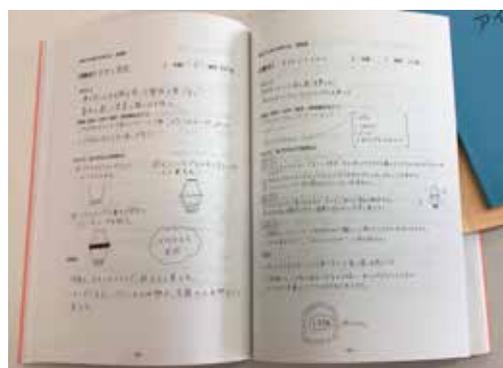


写真18

本取組に複数年度かかわってきた上級生は、保育現場での実習でこれらの冊子やワークショップの経験を活かし、さらに多様な表現を実践的に身につけ、既存の保育雑誌等に頼らない保育活動計画を立て始めている。本取組開始以前から学科で所有していた既存の教材（iPad、パネルシアター等）の活用の幅が広がり、グループでの表現、個人での表現にも多様性がみられるようになった。

幼児の表現を支える立場として、保育者には柔軟な創造的表現力を身につけることが求められる。複数学年共通の取組、学年間の伝達の試みを学科の協力を得て実施することで、個々の学生の学びを深めるだけでなく、学科全体で保育者としての表現力の底上げができた。今後さらに学年内・学年間で共有することで、創造的表現力の向上が期待される。

## 謝辞

本教育研究活動は、和洋女子大学教育振興支援助成に採択されご支援いただきました。また、諸事お忙しいところ、ワークショップにご協力くださった外部講師の皆様に深く感謝申し上げます。

大神 優子（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 教授）

駒 久美子（千葉大学 教育学部 学校教員養成課程 乳幼児教育コース 准教授）

伊瀬 玲奈（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 准教授）

甲斐万里子（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教）

上村 明（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教）

島田由紀子（國學院大學 人間開発学部 子ども支援学科 教授）

中村 光絵（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教）

（2020年10月13日受理）